

片山潜

立川健治

【要約】 本論でわたしは、片山潜の思想と運動を「文献的」に解釈するのではなく、それへの執念を生みだし支えていたものが一体何であったのかという観点から片山をみていく方法をとった。このように考えたとき、片山の「一八八四〜九六年（二五〜三七歳）の「在米生活」は、生涯の軌跡を決定したといつてよいほどの意味をもっている。なぜならそこで片山は、「欧米社会」のもっている圧倒的な重量を「先進（優越）性」ととらえることによって「日本社会」の「後進（劣等）性」を、いかえれば「日本の現実」を棚上げあるいは欠落させることによって「欧米の先進（優越）性」を手に入れたからである。そしてこのことが片山の場合、日本の健全かつ合理的な「近代化」のためには、欧米の「進歩的」な社会思想と運動を日本に移殖することが不可欠であるという「情念」と結びついていったからである。片山の生涯の軌跡から夾雑物を取りさつてみれば、その根底には常にこの「情念」があり、それこそが片山の思想と運動の実体だった、というのがわたしの考えである。

史林 六六巻二号 一九八三年三月

1 はじめに

片山潜（一八五九〜一九三三）は、「権力闘争」下のソヴィエトで「コミンテルン執行委員会幹部会員」という「栄光」をあたえられた晩年、自分の足跡を「進歩の生涯」をすごしてきたものとして満足げに、つぎのように回想している。

「予の意識的七十年間は、実に進歩の生涯である。山間僻地の農村に始り、あらゆる変遷の境遇を経て来た。封建治下に生活を営み、封建破壊の明治革命を少年時代に経験し、明治文明、即ち西洋文化の輸入時期に於て、晩れ走せながら学問に志して郷里を出て後、北米に渡り、不完全ながら之が目的を達した。

思想的にも進歩の途を辿って来た。仏教の迷信、偶像崇拜から、有信の信徒、進んで無信徒の唯物論者となり、労働運動者として
も組合主義から社会主義に進み、議会主義から共産主義へ、而して今ソビエト同盟の社会主義建設の真只中に生存するに至る。^①

もしかすると人は、晩年になると、あるいは「えらく」なつたと思うと、大なり小なり、自分のそれまでの生涯を起承
転結をつけて合理化したくなるものなのかもしれない。だが、人の生涯が、ここで片山が跡づけているようなものでない
ことは、なにも片山の、そして他の思想家・運動家・文学者と呼ばれる人々の生涯にわざわざあたらなくとも、わたした
ち自身の今までのそれを少し内省するだけでも充分わかることである。もし、人の生涯を直線的に考え、何らかの意味で
「進歩」したかのようにみえる生涯だけを肯定的にとらえようとするなら、片山のそれは、まさに格好の材料であるかの
ようにみえる。だが、「一身の幸福を犠牲にし、終生労働者大衆のために闘った」かのようにみえる生涯だからといって、
必ずしも、片山の思想・運動を評価しなければならない、ということにはならない。それはちょうど、貧苦に苦しみが
らも、「芸術」に自分の生涯をささげた「私小説家」の小説、あるいは官権の「過酷な弾圧」のなかで「階級闘争」のた
めにかかれた「プロレタリア文学」だからといって、必ずしもありがたがって読む必要がないのと同じことである。くだ
らないものは、くだらないのだ。片山の「したたかさ・ねばりづよさ」、ようするに片山が果した「進歩的役割」は評価
しなければならぬという観点は、夾雑物をとりのぞいてその心情にまで立ち入ってしまえば、片山のつぎのような、人
がある陣営に属するか否かという単なるレッテルで、「進歩的人物」か否かを判断できるという無惨な考えと、大同小異
であることはまちがいない。

「世の中の人は教育の有無に拘らず二様に分かれる傾向がある、一は年を取るに従って化石的に成る人がある、と同時に世と共に進
化していく人もある、前者は保守的であり後者は進歩的である、吾がトム・マンは慥かに進歩的の人である。」^②

「……運動を共にせし同志等に關しては、今日尚存命し又或いは夙に故人となり、或いは主義上死滅又は裏切り、甚しきは破信以て
予等の反対側に在りて蠢動する所の変節漢もあり、墮落して世間から埋葬られた者(西川光二郎)もあり、変節してブルジョアの陣

宮に降ったものもある。詮じ詰むれば、予の反対側の旧友は時勢と共に進歩し発展せぬ全くの卑怯者である。彼等は憎悪すべき又賤蔑すべき者ではあるが、又憐憫すべき昔の友達である。^④

なぜ多くの人が、このような馬鹿げた見解を得意げに披瀝している片山につまづくのか。それは、片山の「献身的な活動」とそのときどきの時局的発言の「妥当性」、そして「タネ本思想」を、ただ単に「文獻的」に解釈するだけで、そこからもう一步踏みこんでそれらの論理的な解析をしようとはしないからである。そのことをたとえていえば、片山が「今日から、わたしは社会主義者だ」といったら、その後の思想と運動から自分の「好み」に応じて「社会主義」的要素を探りだしてそれを「成長」といい、そこに「改良主義」や「体制順応」的要素を見出すと、いやそうであったにしても現実的には「進歩的な役割」を果たしたのだと評価し、つぎに片山が「今日からは、ボルシェヴィキだ」といったら、それまでの軌跡を何とかこじつけていく、といった趣である。このことは、片山を総じて「つまらない」と否定的にとらえる見解にも、同じことがあてはまる。その裏返しにすぎないということだ。

わたしのみるところでは、片山の思想と運動が「進歩性」をもつとする見解は、明治以降の社会運動・思想を「民主主義・自由主義」の浸透・定着過程という面からとらえ、それを「戦後民主主義」にまで連結させていこうとするモチーフがあるのに対し、「つまらない」とする見解は、主としてそのなから「革命性」をどのようにひきだすかを問題にしているところに、それぞれの片山評価が見合っている。おそらく、人が抱いている明治期社会運動・思想、そして大正デモクラシーへのイメージは、その人が片山をどう評価しているかでおしはかったとしても、それほど目的はずすことはないと思われる。(念のためいっておけば、片山の性格に対する好き嫌いの別をいっているのではない。)

今までの片山へのさまざまな評価がみせてくれているものは、一体何であろうか。それは、片山の思想と運動からじかに「論理性」をひきだそうとしたら、自分の「好み」に応じて「進歩性」や「つまらなさ」を云々するのがせいぜいであり、うまくいって「タネ本」にいきつくのが関の山だ、ということである。片山の「進歩性」をいいたいのならば、その

「進歩性」はどのような構造をもつのか、あるいは逆に「つまらない」とするならば、その「つまらなさ」の論理的な根拠は何か、その内在的な理由を思想的に明らかにすることが必要なはずである。

わたしが片山の生涯の軌跡をたどってみてもった感想についていえば、それは、人は自ら思想を生みださなくても、人並ならぬ行動力と情念だけで「労働者（民衆）のために」を題目に運動をつづけるとともに思想にもありつくことをつづけているうちに、いつのまにか「先頭」にたってしまい、同時代からもまた後世からもさまざま読みこみと粉飾をほどこされたり、逆に嫌悪と拒絶の対象になったりしてしまうこともおこりうる、といったものである。わたしの考えでは、このような片山の軌跡からまずとりだすべきは、その軌跡を生みだし支えていた情念とも呼ぶべき「心情」あるいは「肉声」である。なぜなら、そうすることによって、思想から「タネ本」そのものでない、また運動からは「進歩性」や「改良性」ではない、「思想性」をいわば「実体」としてひきだすことができるからである。もっといえば、片山を「実体的」ととらえようとするかぎり、「心情」あるいは「肉声」を問題にしなければ、何事もはじまらないからである。

わたしは、そのことをまず、片山の「在米体験」を手がかりにしてみたいと思う。そこには、片山の生涯の思想と運動のほとんども、予感されているはずである。

① 片山潜『わが回想』下 徳間書店 一九六七年 三一―一頁

② 隈谷三喜男『片山潜』 東京大学出版会 一九六〇年 二二―二頁

③ 片山潜『自伝』 岩波書店 一九五四年 一八―三頁

④ 前掲片山『わが回想』下 三一―二頁

2 在米体験

片山潜が渡米したのは、一八八四年、二五才のときである。それまでの片山の生活の軌跡は、回想類をみるかぎり、生活にどのようにもまれても辛抱強く努力を積み重ね、何かに執着しつづけるといった、のちの片山は姿をみせているが、「学問で身をたてよう」と思いながら、うまくその場を見出せないまま、生活的にも精神的にも彷徨をつづけてしまった

青年といった趣である。そこからは、とりたてて強いとはいえないが、明治期の普通の知的な青年がもっていた程度の「立身欲」と「国家・社会への使命感」をもった、農村出身の貧乏な学問に志をもつ青年の姿しかひきだせない^①。片山の渡米は、この彷徨の延長線上にあったように思う。

片山の友人、のち「パトロン」にもなった岩崎清七(吉)の回想によれば、岩崎と片山は渡米前、「将来の日本の発展に對する準備としては、是非この際一と奮発して、英米何れかの文明国へ遊学せねばならぬ」と語りあっていたという^②。ほぼこれと同じことを自らの在米生活の目的として、片山は、在米生活五年、労働のかたわら本格的な大学生活を送るようになって二年を経た、一八八九年にも語っている。

「……我国は、政治的・宗教的諸問題において、革命的な最も重要でかつ最も多忙の時代にあり、あらゆる愛国者を必要としている。我々は、我が祖国の将来に役立ち、奉仕する為我々の精神を訓育し、又教養を高める為に、より高い文明の眞の知識を得る目的でこの國へ来ているのである^③。」

これをそのまま読めば、「日本の近代化」のために「欧米社会」の「先進性」を学び摂取し、そしてそれらを日本へ移植しようとする発想が、五年間の在米生活のなかで失われることもなく、ますます強固なものになっていった、ということになるだろう。しかし、よく考えてみればわかるように、このような発想が渡米前にもたれたということと、五年の在米生活を経てももたれていたということの間には、それ相当の差異がある。なぜなら、その間には、ハウスワーク・コック・スクールボーイ等の「下層の労働体験」があり、「野心満々の青年」をくたばらせるに充分すぎるほどの屈辱的な「在米体験」があったことは、たしかだからである。問題は、明治期のある程度の知識人タイプの渡米者であれば通常みられた発想そのものにあるのではなく、それが実質的には「出稼ぎ」と変らない生活のなかで、変容もしないでますます強くなっていたところにある。いいかえれば、問題は、実質的には「出稼ぎ」と変らない生活のなかで「国家・社会への使命感」を露出させる際に、片山がそこで、何を棚上げあるいは欠落させ、また何を代償として支払ったか、ということ

ろにあるのである。江藤淳の言葉をかりれば、人は何も支払わずに外国暮らしをするわけにいかないからである。^④

片山がのちに『渡米案内』（一九〇一）のなかで、アメリカで生活のために「飯炊き・庭掃き・便所掃除・風呂場掃除」等の「下層の職業」に従事することを余儀なくされても、またそこでアメリカ人に「罵られ土足に蹴ら」れるようなことがあっても、つぎのように思っ、「耐忍」すべきだとのべているのは、その棚上げあるいは欠落、代償の一つが何であったのかを示唆している。

「天下に耻づることなき理想を以て進まば、何の怒るところかあらん、何の耻づるところかあらん、其天下に耻ぢざる志を以て、賤しき業を為すはこれ却って美なり」^⑤

ここで片山がいつているのは、「学問」のためには自分の生活体験には目をつぶれ、「立身」・「日本の近代化」のためには「先進文明」を学べ、アメリカでのつらい生活体験はその際の代償みたいなものだ、ということである。ここに示されているように、片山は、一八八七年ホプキンス・アカデミーに入学するまでの在米生活を、それ以降の大学生活の準備期間、自らの思想は大学生活のなかで講究して得たと考えていたようである。だが、このような考え方は、「欧米」との思想的な格闘をさけたに等しいといってよい。なぜなら、その思想がふくらみをもつかどうかは、それ以前の日本での生活・社会体験を、そして渡米後の一介の「出稼ぎ」としての、「後進国」からきた貧乏な「留学生」としての体験を、そこにもどうもみこなすかにかかっていたと考えるべきだからである。

片山にとってアメリカでの生活は、のちのちになっても郷愁を感じさせるものであったし、亀井俊介の指摘する通り、片山がアメリカを語るとき、そこには「自由な労働と勉学の国アメリカ」に対する親近感が満ちあふれている。^⑦ ある人物にとつては、「欧米の社会」からいかなる屈辱をしいられたとしても、「欧米の社会」のほうに「日本の社会」より膚に合うということがあるのかもしれない。片山が、日本での運動にいぎつまり精神的・肉体的な疲労におそわれると、たとえどのような理由をつけたにしても、それをいやすかのようにアメリカへ渡り、また「日本人同志」からは「頑固で偏狭

だ」と評判が悪かった片山が、「外国人同志」からは好意の目でみられたことも、片山にとっては「欧米の社会」のほうが膚にあつていたことを示しているのかもしれない。片山のこの膚のあい方は、わたしの考えでは、多くのもののそれがそうであるように文学や思想からやってきたものではなく、片山が身につけていた合理主義的な「金銭哲学」が暗示しているように、アメリカでの生活からやってきたものである。たとえそこにどのような屈辱があつたにしても、アメリカでの生活のほうが、居ごちよくましだと思われたのである。とはいっても、片山の在米生活の外面的な様相が、大多数の「出稼ぎ」や「留学生」のそれと異つていたわけではない。日本人からだまされ、足をひっぱられ、あるときは助けられ、またアメリカ人からは遅れたアジアからきた得体のしれないやつだというあつかいをうけたり、懸命に身構えて学問に打ちこむ姿にアメリカ人の学友から畏敬の念をもたれたり、そして結構愉快に生活を楽しんだり、ということがあつただけだ。ようするに、「後進国」の人物の「先進国」での「出稼ぎ」と「留学生」としての生活があつただけである。ただ大多数の「出稼ぎ」や「留学生」が、生活の本質的な面からみれば、「アメリカの社会」からおりてしまつていたのに対し、片山は充分生活でそこに入つていた、いいかえれば、結局は觀光気分としかいいようのない「何でもみてやろう」式ではなく、アメリカでの生活の実体がどのようなものであるかを実感させられるだけの生活をしたのである。^⑧

そのことは、つぎの『渡米案内』の一節をみるだけでも充分である。

「若し米國に在つて金儲けを為す労働者に其金なかりせば人に非ず、人間たる待遇も受けざるのみか、畜生よりも酷たる目に逢うは必然なりとす。」^⑨

鶴見俊輔がいうように、片山の『自伝』が「自分の生活に影をおとしたものをおしてえがいたすぐれた北米紀行」の一つとなつてゐるのは(わたしも同感である)、わたしの考えでは、片山がこのような「金銭哲学」を、そしてそこでの屈辱を、のち日本で「同志」から「ケチで利己的だ」といわれたことからわかるように、「肉声」として語れるほどにまで身につけた、あるいはつけさせられていたからである。ここから想像をたくましくすれば、ここで可能性としては、あく

までも可能性ではあるが、片山が「アメリカのデモクラシー」の実体的な基盤である「エゴイズム」を、思想的につかまえるだけの契機は存在していたともいえる。だが片山は、可能性としては本質的な意味での「ブルジョア・デモクラシー」につながる「金銭哲学」や「精神的な屈辱」を、のちの思想的な軌跡をみると、自らの生活思想とはしても、「講究した思想」ではそれを棚上げ、あるいは欠落させたのである。「金銭哲学」や「精神的な屈辱」を、自覚して思想的にとりだすことはなかったのである。いいかえれば、「思想としての在米体験」のなかでは、「アメリカ(欧米)の先進(優越)性」しか見出せないのである。たとえば、つぎのように。

「何者も日本に輸入されつくあり。独り労働運動に於てのみ然らざる乎。否既に日本にも労働運動始まりたり。既に此の始まりたる労働運動は欧米流とならずして止むべき乎。或は之れ疑問なりと云う者あらんかなれども、吾等は断言す、欧米の如くなるべしと。」^⑩

ここで片山がみせてくれているものは、この『日本の労働運動』が執筆された時点で足かけ五年にもわたる運動体験があったことを考えあわせれば、片山のような「思想としての在米体験」で欧米の社会運動・思想をつかまえるるとどんな無惨なことになるか、一般的にいいなおせば、欧米に「タネ本」をもつ「進歩思想」がそもそもどのような無惨な発想によって支えられているのかをみるうえで、これ以上おあつらえむぎのものはないといつてよいくらいの見本である。ここにはすでに、「万国社会党」への道も「ボルシエヴィキ」への道も、ようするに「世界の大勢」への信仰が準備されている。この無惨さと同様のものは、片山が在米生活時に被った屈辱を、『渡米案内』・『続渡米案内』・『渡米の秘訣』等の一連の渡米もので、「後進国」の人物が「先進国」の進んだ文化・生活様式のなかでどのようにすれば笑われないですむか、というような「欧米への後進(劣等)意識」の問題に屈折させてしまったことにもみることがができる。別段ある人物が、このような発想をもつためには、「欧米での体験」を必要とはしないだろうが、片山が「アメリカ社会」の「現実」でもまれながらも、そこから思想的には結局、「欧米の先進(優越)性」だけをとりだしたことのなかに、いやそれだけしかとりだせなかったことのなかに、片山の思想のあり方がうきぼりにされているのである。

冒頭にもふれたように、片山が渡米したのは二五才のときである。常識的に考えれば、二五才といえば一通りの生活体験・社会体験を積んで、自己形成をほとんど終えている年令である。それは、觀光気分か無関心で素通りしない限り、アメリカという異質な社会との軋みを生じさせるに充分なはずである。片山の帰国直後の論稿・著作が、渡米以前の漢学の素養の痕跡を全く残さず、また「タネ本」を啓蒙するという文体からなっていることをみれば、片山が思想的には、在米生活のなかで、それまでの「自分の過去」・「日本的な現実」を棚上げあるいは欠落させ、「欧米」に全身をさらしていた、あるいはさらそうとしていたことを示している。このようなことは、よほどの自己解体をしいられる体験がそこにあったか、あるいは少年のように「アメリカ社会」に自然にとけこんだか、のいずれかの場合を想定しない限りおこりえないものだろう。のちの論稿・著作、たとえば『自伝』のなかでも、渡米前の「自分の過去」・「日本的な現実」が、なつかしさを感じさせるものであっても、それらが単に「進歩する前のものだ」と考えられていることは、在米時に片山にのしかかった「欧米の社会」の重量がいかに圧倒的なものであったか、そして片山が生涯その体験の重量から抜けでられなかったか、を示している。片山は、日露戦争後アメリカで一段と激しくなった「排日」の風潮に対して、「是れ狭量にして自負心満々たる北米人の為しそうなる卑劣手段なりとす」と書かずにいられたように、「在米体験」のなかで味わった屈辱は、ことあらば感情的な怒りをすぐ触発するほど深かったにもかかわらず、またさきにふれたような「先進社会」でどのようにすれば笑われないですむかという屈折した感情もうけた傷の深さを示しているにもかかわらず、それを思想的には秘しさせるほど「欧米の社会」は圧倒的な重量をもっていたのである。片山は、おそらく、この「欧米の社会」の圧倒的な重量を、「先進(優越)性」としてとらえたのであり、それにひきずられるように「日本の社会」が「後進(劣等)的」なものにみえてきたはずである。いいかえれば、欧米の「先進(優越)性」を手にいれることによって日本の「後進(劣等)性」を手にいれた、さらにいいかえれば、いままでの手持ちの思想ではたちうちできないと思ひ知らされることによって、欧米の「先進(優越)性」を学び、きろ、うと決意したはずである。片山の場合、このことが、欧米の社会運動・思想を我がも

のにすることによって日本の状況をとらえ「改良」することができる、という発想を身につけることと結びついていったのだと思う。この推測は、たとえば片山が在米中キリスト教を「民衆への啓蒙」・「社会改良」という観点から、著しく社会性をもつものとして、また実践的に読みこんでいたことによくできているように、はずれていないはずである。

このような「欧米への後進(劣等)意識」から、先の「何故我々はアメリカに来るか」は書かれたのである。わたしはここに、片山の「思想としての在米体験」を収斂させてしまっただけだと思う。なぜなら、「欧米の社会」の重量から思い知らされた「日本の社会の後進(劣等)性」をいかに「先進的なもの」に引きあげていくか、という自らの生涯の思想を、「欧米の社会」と「日本の社会」の構造の差異を「先進(優越)性」と「後進(劣等)性」という時間性の差異の問題に一元化することによって、手にいれ始めた片山の姿を見出せるからである。そして、この「後進(劣等)意識」の内容にたちれば、のちの社会運動家としての姿も、そこに見出せるからである。

片山の「思想としての在米体験」は、「自分の過去」・「日本的な現実」を単に「進歩する前のもの」として棚上げあるいは欠落させ、そしてまた在米時の生活体験・社会体験から「アメリカの社会」の実体をつかんでいく道をとぎすという代償を支払ったのである。ここで片山が棚上げあるいは欠落させてしまっているのは、「日本の社会」と「アメリカの社会」での生活体験・社会体験の相異は相対的なものではないか、また欧米の社会運動・思想を日本へ移殖しようとしてそれを懸命に撰取している自分とは一体何者なのか、そして日本の民衆とは、社会とは、国家とは何であるのか、という視点や実感であるようにわたしには思える。

片山が、のちにいたっても欧米の社会運動・思想を単に「タネ本」にしかできなかったのは、いかえれば片山がのちにみせてくれた軌跡は、このような「思想としての在米体験」のあり方からいって、論理的必然だったのである。

① 前掲片山『自伝』・『わが回想』上・下、その他『自伝草稿』(『前掲』臨時増刊一九五九年一月所収)・「歩いてきた道」(片山潜生誕

百年記念会編『片山潜著作集』第一巻 河出書房新社 一九五九年所収)等参照。

② 岩崎清七『欧米遊蹤』アトリエ社 一九三三年 一四一頁。片山が『自伝』のなかに記している、徴兵を前にして相談にきた岩崎に渡米をすすめたときのエピソードも、内容的には同様のことをいっている。

③ 「予は此の時何を考えて居たか知らぬが、岩崎に勧むるに渡米を以てした。且つ激励して兵士となるよりも渡米して西洋文明を学び帰国以て邦家に尽すの遙かに優れりと懇々と語り渡米を勧告した。(前掲片山『自伝』一〇九頁)」

④ 片山潜「何故我々はアメリカに来るか」アイオワ大学『ニュースレター』第一七卷三号 一八八九年一月二日(柴田徳衛「若き日の片山潜―新発見資料等の紹介」『経済と経済学』第二五号 一九六九年一月一〇日所収 一五頁)。これと、片山が「L・F・パーカ宛 一八九四年一月五日付書簡(柴田同上論稿所収 二三頁)」でのべているつぎのような「決意」とあわせれば、そこにはのちの片山の生涯のコースが暗示されているといつてよい。

「年がたち私の経験が豊富になるにつれ、最近になって私の宗教的経験は大いに變化しました。私はイエス・キリストの愛の教えを望む気持ちがあります。私はアメリカ人、日本人双方にユニテリアン派の友人に近づきをもっており、宗教について、はるかに急進的な教理や見解を聞きました。それを聞くにつけ、私は過去十年の私自身の宗教経験を考え、一層それと相容れることができなと感じました。私は宗教は、私にとって知性又は哲学に基づくものでなく、良心の経験に基づくものでなくてはならないと今思っています。私は帰国したら、抽象的な哲学でなく、キリストの福音のみを一途に教えようと思います。私は抽象的哲学を理解もしないし、満足もしません。私はユニテリアンの友人からさらに学者である他

のクリスチャンの中にさえ、献身の精神の不足をみます。日本の一般庶民の間に福音を伝える必要を痛切に感じます。」

④ 江藤淳『アメリカと私』(『江藤淳著作集』4 講談社 一九六七年所収 六五頁)

⑤ 片山潜『渡米案内』労働新聞社 一九〇一年 五〇頁

⑥ たとえば前掲片山『自伝』一三三〜二〇四頁

⑦ 亀井俊介『自由の聖地』研究社 一九七八年 一六六〜一七四頁

⑧ 片山の在米生活については先にあげた、片山の回想類、岩崎による回想(他に「旧友片山潜を語る」『経済往来』一九三三年 二月号)、

柴田による新資料の紹介、そして加藤秀俊「片山潜のいくつつかの書簡について」(『人文学報』二〇号 一九六四年所収)と、前掲片山『渡米案内』・『統渡米案内』(渡米協会 一九〇二年)・『渡米の秘訣』(出版協会 一九〇六年)等参照

⑨ 前掲片山『渡米案内』三四頁

⑩ 鶴見俊輔『北米体験再考』岩波新書 一九七一年 一八七頁

⑪ 片山潜・西川光次郎『日本の労働運動』一九〇一年 岩波文庫版 二五七頁

⑫ たとえば、前掲片山『渡米案内』第二章 第六章 一三〜五五頁

⑬ 片山潜「北米日本人排斥の真相」『東京二六新聞』一九〇七年三月一四〜一八日(鈴木正「片山潜北米日本人排斥の真相」『歴史評論』一〇四号 一九五九年四月 所収 八六頁)

⑭ 片山潜「序文」同「L・F・パーカ宛 一八九四年一月五日付書簡」(前掲柴田「若き日の片山潜―新発見資料等の紹介」二〇〜二二頁

・二三頁)、および前掲加藤「片山潜のいくつつかの書簡について」参照

3 思想の構造

一八九六年の帰国から翌年、「キングスレー館」・「社会問題研究会」・「職工義友会・労働組合期成会」等の社会運動に關わるまでの片山の足跡をみると、この時期の片山が論壇的には、欧米仕込みの新思想で日本の思想界に対して優位にたてると思いこんだ、いささかオメタイ新帰朝者としての趣がないわけではない。この時期の論稿であつかわれた主題は、「社会学」・「都市政策」・「社会政策」・「ラサール」・「演劇論」・「鉄道と産業」等であり、そこに社会問題を論ずるという傾向性はあるにしても、一つ一つは自分の「知ってる」ことを何でも書いたといった程度で、結局は「タネ本」にいぎつくものであり、それらを「文献的」に整合したとしても、どこか片山の「心情」あるいは「肉声」とちがってくるように思える。そこからは、「民衆・社会の近代化(社会改良)」に対して「有効性」をもち、そして社会経済力の発展・膨脹をももたらす、いいかえれば、「後進国」から「健全で合理的な先進国」へひきあげるといふ「日本の近代化のヴィジョン」をいかなる思想に託して表現するか、ということをはきだすのが、もともと片山の「心情」あるいは「肉声」に近いように思う。この時期の論稿のなから、そのことを読みだすことは、それほどむずかしいことではない。

「(こ)こで「社会学の講学」をする目的は—立川) 唯予の多年(欧米で—立川) 学び得たる処のものを以て、之を实地に応用し、現在の我国社会の講究するの資とせんの徴志なりしのみ」^①

「労働問題を講ずる者は決して地上に風波を起すにあらすして労働問題の激風怒濤は既に地平線上に起状しつゝあるなり。此の危急存亡の秋に存り調和の油を工業海（ぎやうかい）に施し以て労働者の進歩を計り工業の盛大を期するは実に改良家に取りて缺く可からざるの務なりとす」^②」

「我邦も今や労働問題の工業社会を騒がすの兆候ありてこゝに社会問題研究の声を聞くに至れり。此の時に当り独乙国の如き経験に徴して我邦の現状を研究するは良法なりと謂はざるべからず。吾人はラザルの如き人士の出で彼のリカルド、シル、マルシャル等の

經濟説を國民に教へんことを希望するものなり。吾人は我が労働者間に經濟思想を与へ彼等をして文明的生活を望ましめんことを渴望する者なり。知らず日本のラザルは何処に在るやを。」^③

そして、この「心情」あるいは「肉声」は、先にのべたような「在米体験」から、もっぱら生みだされたと考えてよい。

「最後に、予輩は労働制度、貧民制度、都市制度の如き、欧米各国の成功したる結果を、応用するの急なるべきを勧告せざるべからず。十九世紀の文化は、決して少数資本家のみ、独占すべきものに非ず、國民は皆之を享有するの権利を有するなり、何となれば、少数資本家よりも、寧ろ多数國民の文化を賛翼したること多ければなり。」^④

「然り吾人の考えを以てすれば、我國民が、國を去つて遠く万里の波濤を犯し、以て他郷に入り、外國に於て一事業を企て、一身の經濟を立つると云うことは、これ國民として最も忠君愛國と云うべきものたることを信するものなり、故に日本の物品が益々世界に輸出さるゝことも、工業の益々盛んに至るも、將た日本の人民が智識を増し進歩することも、又日本の國人をして其勢力を伸張し商業を發達し得ることも、皆之れ多くの平民が移住し、又は出稼して外國の事情に通じ、事業を企圖するに職由するものと云う可し」^⑤

ここに、「欧米の社会」の「先進(優越)性」に対する「日本の社会」の「後進(劣等)性」が、片山にあっては主に、「低く遅れた社会経済力」と「貧しく遅れた民衆」というイメージがからみあったものとして、とらえられていることを見出すことができる。片山のこのような「欧米への劣等意識」からくる「後進意識」は、骨がらみになっていたといつてよく、アメリカでの「排日」の風潮に対する「反応の底流となっていたものが、日本も一刻も早く生産力をあげ民衆も「近代化」して「先進國」の仲間入りするようになれば、つまり「欧米化」すれば、「排日問題」は解消するといったものであったこと^⑥は、そのことをよく示している。このような「後進(劣等)意識」からくる、健全で合理的な「日本の近代化のヴィジョン」ともいふべき「社会ヴィジョン」がさしあたつて、実践は「キリスト教社会事業」で、思想は「社会学」で、人物的には「ラザル」的^⑦にというのが、帰國直後の片山である。いかえれば、「思想としての在米体験」は、さしあたつてこのようなものとして、もち帰られたのである。^⑧

多くの研究者がいうような「改良主義者」という意味で、この時期の片山が、思想的に「未熟」でも「不充分」でもあったわけではない。なぜなら問題は、各時期の思想的衣装から、片山の「心情」あるいは「肉声」を、どのようにひきだすかにあるからである。そのように問題をたてるならば、帰国直後の片山のなかに、つまり「思想としての在米体験」のなかにのちの片山が、いいかえればこの時期のそれぞれの媒介項を、たとえば「社会学」を「社会主義」というように、あるものにさしかえ、または加えさえすれば、その姿を現わしていたと考えるべきである。

ここで、そのことを象徴的に示す例を、あげておこうと思う。岡千仞の塾で学僕をしていた一八八二年頃、岡の『維新革命史』の編纂を手つだい維新の志士たちの足跡を知るにつれ、「志士たちに私淑するとともに悲憤慷慨の士を気取る」ようになって、「熱心な勤王家になった」、という片山が『自伝』に記したエピソードは、よく知られている部類に入るのである。だが『わが回想』では、エピソードは同じ内容でありながら、「勤王家」の部分が「熱心なる革命家たらんとを欲するようになった」、と書きかえられていることにはあまり注意がはらわれていない。わたしはここで別段、片山がごまかしをやったといたいわけではない。『自伝』と『わが回想』が重りあう他の個処でも『自伝』の内容にありきたりの社会的・政治的背景、とってつけたようなアメリカ社会の皮相性をつけ加えて、「唯物史観」を気どっていることにもみられるように、言葉をさしかえたり加えたりするだけで、思想を「進歩」させることができる、と考えていたことを指摘したのである。わたしの考えでは、片山のこのような思想に対する態度は、生涯を通じてみられるものである。このことは、片山の軌跡が、たとえば「労働組合主義者」から「社会主義者」への、「万国社会党」から「コミンテルン」への移行が、ビンの中身はそのまま、それには「勤王家」というレッテルだけを「革命家」とはりかえた程度にすぎない、という観点も必要なことを示している。レッテルの選択にもまた、それなりの思想性があるという見解もなりたちうるだろうが、ここでは、レッテルそのもの、あるいはそのレッテルと中身がどれほどマッチしているかではなく、レッテルを選択した「心情」を考えているのである。

一 社会ヴィジョン

いまでは、片山の「社会主義者」となるまでの労働運動論が、労働運動と産業社会の実現・生産力の膨脹との融合策、いわば「下から」の「健全で合理的な富国策」ともいうべきものからなりたっていることは、よく知られている。現在までの片山研究では、このような「富国策」こそ、「経済を基礎とした社会の有機的關係について」の「最も明確な理解」を示したものにほかならないという松沢弘陽の評価を別とすれば、片山はこのような「富国策」を手離すことによって「社会主義者」となったと考えられているか、あるいはその残像を見出すとき、それを片山がもっていた「不充分性（改良主義）」とみなすか、のいずれかである。① だが、片山のもっている生産力理論的な部分をとらえて高く評価していることを別とすれば、松沢がいうように、「社会主義者・片山」は、その「富国策」を手離してはいないし、「富国策」こそが「社会主義者・片山」の「個性」である。わたしの考えでは、片山は生涯、「下から」の「健全で合理的な富国策」という「社会ヴィジョン」を手離しはしなかったし、「社会学」・「労働運動」・「社会主義」・「ロシア革命」をそのようなものとして読んだといえるのである。

明治三〇年代のことについては以前にも簡単にとはいえふれたが、明治四〇年代にいたっても、その思想的な衣装の下に同質の「社会ヴィジョン」が保持されていたことをみるのはそうむずかしくない。たとえば、それぞれの時期の「工場法」についてのべた論稿をとりあげるだけでも、充分である。

一八九九年・「吾人は上来記したる事実により我邦の工業を盛にするにも亦文明の方針に向て機械の精良労働者の善美に尽力せざるべからざるを信するものなり（中略）工業をして真正に健康なる生長をなざしめんとするか吾人は是非とも工場法の制定を期望せざる可からず」②

一九〇九年・「工場法の制定は刻下の急務なり、年々増加する工場労働者の保護をなすは独り労働者のみのためにあらず我産業発展の上に急務なり、日本人種の保全を欲し大和民族の発展を期望する者にして工場法に反対し得るや」③

そして、「ロシア革命」以前における片山の思想が集約して表現されている一九〇七年二月設立されんとした「平民協会」の「規則」が(このことについてはあとでふれる)、「憲法治下ニ於テ社会主義政策ノ実行ヲ努ム」とともに、「労働者ヲシテ労働組合ヲ組織セシメ以テ基経済ノ独立ヲ計リ国家産業ノ基礎ヲ強固ニスル事ヲ努ム」とのべていることをみるならば、なお一層そのことは、はっきりする。

だが、明治三〇年代・四〇年代それぞれの時期の論稿の背後にあるニュアンスの相異をみがさなければ、そこにある日本資本制の「発展」に伴う社会状況の変化によって被った「社会ウィジョン」のもつ方向性の変化、いつてみれば「新築案」と「改築案」のちがいを、見出せないわけではない。それは、片山が、日露戦争後から明治四〇年代に入つての日本資本制を、明治三〇年代のように「産業社会の実現」と「民衆の幸福」を融合してもたらさねばならないといった程度ではとらえられなくなつてしまい、しらすしらすのうちに、「産業社会の発展」と「民衆」との対立・矛盾がすでに強固なものになつてしまつていて、というように感受しはじめていたことを示している。「産業の発展」から民衆はとり残されている、というように。つまり、「後進(劣等)性」だけでは、日本資本制の「発展」を、とらえられなくなつてしまつていたのである。これは、理論的には、「後進(劣等)性」から「跛行」という概念の導入の余地ができたことを意味している。ここで、明治三〇年代と四〇年代における片山の「社会ウィジョン」の方向性をちがえさしているのは、「生産力の健全化と合理化」をはかる「生産力理論」的要素を強めたことであるように思われる。

片山は、おそらく、このような「生産力理論」の延長線上で、「ロシア革命」の大部分をとらえていたはずである。たとえば、一九二〇年頃書かれた『革命的社會主義への道』の「結論」で、のべられているように。

「第一次世界大戦後―立川）今や資本主義は人類の悲惨を救済して幸福の地位に置く能わざることを示した。(「ロシア革命」が実証したように―立川) これを救ひ、これを改善し、進歩させて、幸福ならしむるものは、ただ社会主義あるのみである。われわれは社会主義の長所を示した。経済の点において、政治の組織において、今日資本主義の欠陥を矯正してなお発展し得る道を示した。要

は、各国の労働者が奮起してこれが実現に努力することにあるのである。」^⑩

ここで片山がみせてくれていることは何であろうか。それは、「欧米社会」への「後進(劣等)意識」で、日本資本制をとらえると、ちやうど第二次世界大戦後のある時期「後進国」にとつてそうであったように、「社会主義」を「下からの健全な富国策」としてしか読みえないということである。また日本資本制を「後進(劣等)意識」だけではとらえられなくなる、「社会主義」は「資本主義」の「下からの健全で合理的な修正策」として読みこまれるということである。そして、たとえば北一輝が『国体論及純正社会主義』で全力量をかけてみせてくれたように、「社会主義」を「日本的現実」によつてもみこなさないかぎり、それはうまくいって、「タネ本」信仰の「近代主義」になるのが関の山である、ということのようにわたしには思える。^⑪ このことを、もう少し、はっきりさせてみよう。

片山を肯定的否定的いずれに評価するにせよ、研究者が共通して前提としているのは、片山が「終生労働者大衆の解放のために闘った」、いいかえれば、経済社会と民衆の対立・矛盾に対して民衆の立場から憤りをもって運動しつづけたことは、とにかく確かだという見解である。しかし、よく考えてみるとわかるが、この一見妥当性をもつかのような通俗的見解では、たとえば「日本の農本主義」がもっていた「情念」に対しても同じようなことしかいえないように、何もいっていないのと同じことである。問題はそのようにたてるのではなく、片山が「日本的な現実」からとりだしたのが何であったのか、というようにたてなければならぬのである。それを片山の生涯の論稿・著作から抽出してみると、いままでのべてきたことから容易に推測できるように、結局、民衆の「前近代性」と経済社会の「後進性・非合理性」であり、それがあわさった象徴的な意味あいでの「政治」の「後進性・ゆがみ」、ということになる。このことは、たとえば、上に引用した『革命的社會主義への道』の「結論」からもうかがうことができるが、すでに一九〇一年出版の『社会改良手段普通選挙』でも発想としてはそれと同じものをみることができぬ。

「……普通選挙を得て労働者が自治独立の真相を得るならば我邦の工業は屹度発達進歩する。普通選挙を實行すれば労働者に関する

必要なる法律を制定するは決して困難なることでない……」

「抑も社会主義は一九世紀中に発達せる不完全なる社会を一層発達進化せしめて完全なる社会にせんとする主義であつて殊に労働者及下層社会の人民は此主義の実行に依つて古来より压制され来りたる苦界より脱するを得る。」^⑧

このようなものは、片山が日本の「資本主義化・社会主義化」を、ようするに「近代化」を、夾雑物をとりされば、「よりよき欧米化」というような意味あいである、いかえれば「よりよき欧米化」をいかにもたらすかという観点から「日本的な現実」をみることによつて、とりだされたと考えてよい。片山が「明治憲法」から、明治三〇年代の普選運動のなかでは「普選」を、のち日露戦争以後にいたつてその延長線上で「社会主義（議会政策）」をひきだしてみせてくれたことのなかに、そのことは典型的に示しているのである。わたしの考えではこのことは、片山本人はおそらく無自覚だったろうが、単に「明治憲法」から「ブルジョア的な国家理念」に相当する部分だけを、ひきだして読んでいたことを示しているにほかならない。このことは、片山が、『社会改良手段普選挙』の冒頭に、そして、全部を読んだわけではないということわりつきながら北一輝の『国体論及純正社会主義』に共感を示したうえで、それぞれつぎのように書いていることのなかによくできている。

「抑も吾人が普選挙を主張するは之を人間固有の権利であるとして主張するのではない吾人が普選挙を主張するは日本国民としてある。帝国憲法の下に都て国民は同等の権利を有することを証明されてあるからである。吾人日本国民は憲法の前に然り都て法律に於て万民共に平等に政権を有することを保証されてある故に吾人は比憲法の下に憲法の許す政権を得て之を用いて吾人の為め国家の為に活動せんとするのである。」^⑨

「社会主義が我国体と抵触すと喋々主張して社会主義者を迫害し来れるは我国現時の通弊なり、吾人は数年来我國民に向て社会主義を主張し、之が運動を為す時は、常に帝国憲法の一巻を手にせり、吾人社会主義を保護する者、発達せしむる者は斯憲法なり、吾人は法律を以つて規定せる以外に権利義務を有せず、是れ我憲法の保証する所なり、而して斯權利義務の生ずる即ち源泉なる法律其物

は国会の多数に依らずんば他に作制の道なきも亦憲法の保証する所なり、而して既成の権利義務を廃滅し之を破棄する亦議會の機能に依らざれば他に道なし、是れ社会主義者の欲する金科玉条なり、吾人は現存の憲法治下に於て吾人の信奉する社会主義を実行するを得る也吾人の運動の順序は先づ普通選挙を得て国会に多数を占め以て内閣を組織するにあり、既に議會に多数を占め内閣を有するか、上院の反対は更は憂うるに足らずそは新華族に制限なければなり吾人は社会主義と國体と決して牴触せざるを見る者なり。」²⁰

わたしたちが北と片山を読みくらべるならばすぐわかるように、一見両者が「明治憲法」がはらむ「ブルジョア的な国家理念」に相当する部分に注目したことは同じようにみえながら、北が徹底した論理性と革命性をもっているのに対し、片山はいつてみれば思いつきのレベルを越えてはいない。このような質的な差異を生ずる根本的な理由は、北が「明治憲法」そして「国家」との思想的格闘を自力でなしとげ、それらを歴史的な時間性のなかでとらえ自分の理論体系のなかにくみこんでいるのに対し、片山が「タネ本」で「明治憲法」を単に解釈したにすぎないところにある。わたしの考えでは、片山の思想的力量、そしてその思想の「タネ本」性は、「明治憲法」の読み方に最もよくでている。松沢弘陽は、片山が「日常的利益の組織化の累積の前に国家機構が後退していくという漸進主義のイメージ」をもっていた、と好意的ニュアンスでいっているが、もしそうだとするならば、それは、片山が「国家」を「町内会」程度にしか考えていなかったとしかいいようのないことである(実際そういう面はあった)。また隅谷三喜男は、片山がレーニンの『国家と革命』を読むことによつて「明治三〇年以來の階級社会観がここではつきり帝国憲法と天皇制の枠を乗りこえたのである」、と書いている。²¹片山自身もそうにも思っていたことは確かであるが、それは、片山が「国家」を自分の思想から棚上げあるいは欠落させたこと以外何も意味しない。隅谷のこの評価の仕方は、ある人物が誰かの思想にイカレ、それを信仰することが、その思想を我が物としたことだ、というような馬鹿々々しい考え方に通じるものである。第一、『国家と革命』を読んだぐらいで、「国家」がのりこえられるなら、誰も苦勞しない。また読んだぐらいで、のりこえたと思ったのなら、それは本人のオメデタサを示しているにすぎない。片山にとって「国家」は、「政府」や「資本家(資本主義)」への憎悪の別名であったり、

「国土」に対するいつくしみやなつかしさをおぼえる別名であったりただけで、思想的にまともに考察されたことはなかったのである。もし片山が、せめて北の論理性と革命性を少しでも感じるだけの思想的な力量があったならば、思想的に「日本的な現実」にぶつかるといふ意味で、その後の片山の姿は変わっただろうが、片山はあくまでも「万国社会党」のちには「ロシア革命」を日本にどう移植するかという発想に執着しつづけたのであり、北の『国体論』の革命性などわかるはずもなかったのが実情である。片山は、明治四〇年代の「日本の社会主義者は何を要求すべき乎」・「帝国憲法と社会主義」^②といった類の論稿をみるとわかるように、北の理論の字づらを借用したにすぎない。「ロシア革命」以前において、知っていることをいってみただけという程度の「ゼネラル・ストライキ論」^③をのぞけば、片山の唯一の「革命論」らしきものである「普選論・議会政策」も、いいかえれば「明治憲法」がはらむ「ブルジョア的な国家理念」に相当する部分だけを読みだしたのも、もっと正確に言えばそのようにしか「明治憲法」を読めなかったのもまた、そしてレーニンの『国家と革命』へのイカレ方も、日本の社会構造の変化を「欧米化」と同一の方向でしか考えられない、片山の思想のもつ「タネ本」信仰の「近代主義」の様相からきているのである。

このようにみてくると、先にふれた「平民協会」の「規則」が、片山の体制順応におちいりやすい傾向を示しているとか、もはや社会主義ではないとか、いや社会主義運動を維持していくために現実的な方法をつくそうとしたことをみなければならぬとかいう類のレッテルばかりでかたずくものではなく、片山の思想の構造そのものから必然的に生みだされた、片山の思想の象徴的な意味あいをもっているというわたしの考えも、自ら明らかになると思う。「憲法治下ニ於テ云々」は「明治憲法」の「ブルジョア的な国家理念」に相当する部分だけを読みだしたものであり、「労働者ラシテ云々」は「社会ヴィジョン」を示しているにほかならず、そしてこの発想それ自体は、「資本主義化・社会主義化」イコール「よりよき欧米化」という一元的な「近代化論」からくるものである、というように。

片山の思想そして運動を支えていた「心情」あるいは「肉声」は、明治三〇年代においては「欧米への後進(劣等)意

識」から、そして日露戦争以降においては「社会」の「健全化・合理化」をはかるといふ意味から、「経済社会」と「民衆」、そして「政治」を抱合せて「進歩」させていかねばならない、というものであったのである。片山の「社会ヴィジョン」は、いつてみれば、日本のとっている「近代化」のコースに対して、それを民衆を幸福にしかつ合理的に生産力の膨脹ももたらすようなものに修正してより一層の「近代化」を、といった意味あいをもっている。

二 進歩——渡米せよ渡米せよ

明治期の「社会主義思想」が、北一輝をのぞけば、結局「世界(欧米)の大勢」をいかに日本に移殖するかというところにいきついでしまうことは、わたしがいままでのべてきたことから、そしてたとえば、松沢弘陽が明治の「社会主義者にとつてもまた、『進歩』とは『世界の大勢』を敏感に感じとつて欧米のモデルを先取り、また日本の社会や政治に『採長補短』の改革を行うことであつた」、あるいは松田道雄が幸徳秋水の『社会主義神髓』、片山の『我社会主義』にふれて「その筆者が日本人でなければならぬ必要もなければ、読者が日本の労働者でなければならぬ理由もない」、とのべていることからも、そのことをどう評価するかわかれるにしても、そのこと自体は常識として考えていきたいと思う。もちろん片山も、その生涯を通じてのほとんどの論稿・著作が、時期によってよるべきモデルは異なるにせよ、「欧米ではこうなっているから、日本でもこうすべきだ」といったことを(片山がいう様々な問題を研究するとは、この意味においてである)、その主要なモチーフにしているように、また晩年自慢げに明治期の機関紙の誌面で日本の運動のモデルとして欧米の運動の紹介につとめつづけたと回想しているように、その典型的な存在にはかならない。わたしは別段ここで、「文献的」に片山の「ラサル」・「万国社会党」・「ロシア革命」・「レーニン」等への理解が、どこまでであつてどこまでがはずれていたか、あるいはそれが総じて恣意的であつたかどうか、を問題にしようとしているのではない。なぜなら、それをしたとしてもせいぜい、当時の欧米の社会主義運動・思想の読み方の水準を云々しうるにすぎないし、また「好み」の問題にすりかわつてしまうからである。

ここであらかじめ、片山が好んで多く用いた「進歩」という言葉が、どのようなイメージでもって使われていたかについておけば、ただ単に「変化」と同義的に使われているものをのぞいて、それはとどのつまり、「万国社会党」の中には「ロシア共産党（コミンテルン）」を「丸抱え」して、わたしが先にふれた「社会ヴィジョン」の実現をはかっていることが「進歩」だ、といった意味あいでも使われている。いうまでもなく、片山がこのように考えていた「進歩（世界の大勢）」は、その発想の多くを、無意識のうちにかもしれないが、当時日本をそして世界を風靡していた「社会進化論」に負っている。このことをいうのは、何も片山が「社会進化論」を「労働運動・社会主義運動」の立場にたつこととそれ自体が「進歩」、そしてその延長線上で「万国社会党」・「ロシア共産党（コミンテルン）」の立場にたつこととそれ自体が「進歩」だ、と読みこんだことだけをいいたいからではない。（ついでにいうおけば、片山の「第二インター・アムステルダム大会」での、そして「コミンテルン」での「栄光」は、思想的には何の意味もない。）わたしがいいたいのは、「社会進化論」を「欧米の先進（優越）性」と「日本の後進（劣等）性」というところで読みこみ、そこで「万国社会党」・「ロシア共産党（コミンテルン）」を選択した、ということである。つまり、片山がもつような「進歩主義（世界の大勢論）」は、「日本的な現実」を思想から棚上げあるいは欠落させるかしないことにはなりたない、ということである。したがって問題は、なぜ片山が各時期のモデルをいつも「丸抱え」しようとするのか、あるいは単に「日本の言葉」におきかえただけでよしとするのか、というようにたてなければならぬ。いいかえれば、生涯手離すことのなかった「進歩主義（世界の大勢論）」の発想はどこからくるのか、というように。

片山は、「ロシア革命」後の一九二〇年頃、つぎのように書いている。

「日本では社会主義を研究するのは容易なことではないだろうが——立川）然れども、願みて世界の大勢を見るに、社会主義は識者の思想として存在するばかりではない。着々一個確実なる社会制度として実現されつつある。もし社会主義に関して実際問題ありとすれば、如何にして、また何時から、この思想を生み出したる制度を個々の國々に実施するかという問題に限られ、社会主義の制度

が資本主義の制度に優っていることは、けだし責任ある学者のつとに認むるところであろう。」^⑧

これのみただけでも、答えはすでにあきらかである。それは、ここにみられるような「丸抱え」の発想を支えていた「進歩主義(世界の大勢論)」が、「欧米の先進(優越)性」と「日本の後進(劣等)性」といった類の「欧米への後進(劣等)意識」と楯の両面のような関係だ、ということである。つまり、その大部分は、在米期に身につけるかあるいはつけさせられたものだ、ということである。

『自伝』などの回想類をみると、片山が、自分の羽出木から岡山、岡山から東京、東京からアメリカへという「学問」の軌跡を、「立身」と「国家・社会への使命感」を果すための「知的上昇」として、肯定的にとらえていたことがわかる。ここには「社会意識」をもたず「無知」のまま、ただ日常生活に「埋没」している故郷から、意識的に脱出し、「近代的な知識」を獲得した人物が、「進歩」した地点から「遅れた」故郷をみているといった構図がある。片山の「進歩」の原イメージは、おそらく、このようなものだったと思われる。片山が、「民衆」への「啓蒙活動」を著しく実践的におこなったことの大きな理由は、自分の「知的上昇」の軌跡を、そこに重ねあわせていたことになちがいないのである。「とにかく目を開かせさえすれば……」というように。

このような「進歩」のイメージは、片山が明治三〇年代中期から四〇年代にかけて本気でおこなった「渡米協会」の活動を想起させるのである。^⑨ 片山の「渡米奨励」のモチーフは、アメリカは「立身出世」の機会にめぐまれているということと、アメリカにあって「先進社会」にふれることは本人の「進歩」ひいては日本の「近代化」に役立つということにつきるといってよい。そのことは、本論で引用した『渡米案内』の一節をみてもわかることだが、またつぎの『渡米の秘訣』の一節にも示されている。

「吾人が研究せんとする北米は実に彼等青年女子は固より壮年労働者に向つて又学者發明家に向つても最好時期と境遇を与うる場所なり、嘗て北米天然の富源が都ての階級の人士をして其目的を達せしむるのみならず北米の社会組織其者が最もよく住民に自由を与

えよく円満なる発達を為さしむ」

このような「渡米奨励」のモチーフは、少しあからさまにいうと、日本の民衆も社会も体験的にアメリカをすることに よって「進歩」する、ということとどこもちがいはしない。そもそも、渡米に過剰な意義づけなどできるはずがないし、 渡米をすすめるといった発想自体、「欧米への後進（劣等）意識」の産物以外のなものでもない。片山が「渡米協会」の 活動のなかでいいたかったのは、結局「アメリカで進歩してこい」ということにしかならないのである。「民衆の啓蒙活 動」と「渡米協会」の活動は、「民衆への啓蒙」を自からの手でおこなうか、それとも「アメリカ社会」の力を借りてお こなうかのちがいがあただけであって、それらはほぼ同質のものともみなしてよい。つまり、「渡米奨励」のモチーフと 「進歩」のイメージは、その背後に片山自らの軌跡があつて、ほぼ重なりあつていたということである。そしてそこから、 運動・思想、そして社会も欧米の方が「進歩」している、したがって欧米のものを学び日本へ移植することが「進歩」な のだという発想までは、文字どおり地続きであつたのである。

片山の場合、「民衆を啓蒙」することが何ごとかであるということも、「産業社会の実現（社会経済力の膨脹）」ということ も、それらの象徴的な意味あいでの「政治の改革」も、そして「世界の大勢（万国社会党・ロシア共産党）」への信仰もまた、 「欧米社会の先進（優越）性」によって「日本社会の後進（劣等）性」を深く刻印された、その「思想としての在米体験」に 大きく関わっていたのである。いいかえれば、片山が考えていた「進歩」から、その思想的レッテルをはぎとつて発想の 核をとりだしてみると、「民衆」も「経済社会」も、そして「政治」も「欧米」に、のちには「ソヴェト」においつく ということ以外何も残らないのである。^③

モデルを「丸抱え」あるいは単に「日本の言葉におきかえる」こと、ようするに「世界の大勢（万国社会党・ロシア共産 党）」への信仰を「進歩」と考えるところことは、当然その啓蒙を目的とする「日常生活」もふくめて、思想的にみれば、 「日本的な現実」を風景のようにみるだけで、それを自らのうちにもみこなさないところからきていると考えてよいので

ある。片山がここで棚上げあるいは欠落させてしまったのは、批判しているつもりになっていた、日本の「民衆」・「社会」・「政治」そのものであった。やはりここでもまた、「タネ本」信仰の「近代主義の様相」を見出すのがせいぜいであり、もしもしてそこに何らかの意味を見出さなければならぬとするなら、それは、「欧米への後進(劣等)意識」からくる「日本近代化のウィジョン」の「心情」だけである。

「社会主義は資本家産業制度に代って、二十世紀の産業を支配すべき運命を有する世界的大勢を形成する者なり、現代の資本家的産業の終局は必然社会主義的産業制度となるは社会進化の大勢にして恰も影の容ちに従うが如し。若し予が言を疑わば括目して世界の大勢を觀よ！ 欧米の諸國は蕩々として社会主義の實行に向って進歩しつゝあるに非ずや」^④

「労働者の智能の開発に伴うて彼等の漸事自覚するは産業発達当然の結果であって、而かも世界の大勢である。我が日本のみが此大勢に与らずと云うが如きは、事理を解せないものである。

資本と労働、雇主と被雇人との関係は、世界共通である。日本が歐洲に行はる、産業制度を採用したる以上、之が実地従事者たる労働者が亦彼等歐洲の労働者の世界に倣うに至るは水の低きに就くが如きものである」^⑤

三 日常活動

片山が、一九〇〇年の鉄工組合の実質的な崩壊以降も、一九一四年の最後の渡米に至るまで、とりわけ明治四〇年代の「同志」からの孤立、官憲による弾圧にもめげず、何としても労働組合をつくろうとしていたことは、周知のことに屬する。そのことを「体制順応」の「改良主義」的傾向として否定的にみるか、現実的にみて「なしうる」だけのことをしようとしたのだと肯定的にみるか、見解のわかれるところではある。

「〔平民協会〕の「規則」は――立川〕社会主義がいかなる形態・様式によってあれ権力の移行を目的とする以上、片山がもはや狭い意味の社会主義から離脱したことを物語っている。松尾尊兪は片山がこの時期（一九一〇年頃――立川）急速に論調を鋭くしてきた『東洋経済新報』にあたえた影響について分析し、「片山の著大の功績は『新報』の言論がブルジョア民主主義の正道を歩むよう、

社員に働きかけたことにあった」とした(松尾尊允『大正デモクラシー』岩波書店 一九七四年 八四頁―原註)が、それ以後の片山の言論はそれ以外のものではありえなかったのである。^⑤

「このような論(『帝國憲法と社会主義』・『政治と社会主義』・『組合設立の急務』―立川)の字面だけを一見すれば、片山が合法主義者だとか、日本の階級関係を理解していないとかいう説(小山弘健・岸本英太郎『片山潜』第一部 未來社 一九五九年 六六頁―原註)も出てしようというものである。しかし幸徳事件を機とする強烈な迫害の中で、しかも日露戦争前から労働組合の組織がほとんど潰滅している状態の中で、「吾人の運動の中堅は労働者其者にある。労働者を指導し労働者を教育して彼等を自覚せしむるは吾人の第一の任務にして総べてを排して為さざる可からざる事業である(片山潜「吾党の立場」『社会新聞』一九一〇年七月一五日―原註)」の正常なる認識をもって、社会主義運動を維持して行くには、当面はかにとどのような方法がありえたというのだろうか。^⑥

ここでいわれていることをよく考えていけば、結局片山のこの時期の運動に対する評価の相異は、まだ「好み」以外のものになっていないことがわかる。わたしの考えでは、そこに欠けているのは、片山のいう「労働者」とは、「社会」とは、そして「社会主義」とは思想的にみて、一体何を意味しているのかという問いのように思われる。なぜなら、片山の発言あるいは実践が一見するともっているかのようにみえる「妥当性」は、あくまでも一見だけで、それを思想的にみる^⑦とき、わたしがいままでのべてきたことからわかるようにそこには虚妄なものしかないからである。片山の「妥当性」がもつ虚妄さについては、ここでもう一度論理的に片ずけておきたいと思う。

明治期の「労働運動・社会主義運動」のイデオロギーを念頭におけば、片山らが肯定的に「労働者(民衆)」をとらえたとき、総じていえば、「知的向上を」とげ技術をみがく」といういわば「権利」の基盤としての「職業意識」と、「真の産業発展・富国につくす」といういわば社会批判的な「社会意識」の形成という方向からすすんでいたといっていよい。いいかえれば、これが片山らが考えていた「労働者(民衆)の近代化」の内容ということになる。また一方で、明治期の「労働運動・社会主義運動」のイデオロギーは、結局「労働者(民衆)」が「悲惨さ」のなかに眠ったままであがらないのは、

「労働者（民衆）」の「無知」そのものによつてゐるのだという「労働者（民衆）」像しかもちえなかつた。^⑧この肯定と否定のおりなすさまざまなニュアンスのなかで、「労働者（民衆）」への「運動（啓蒙）」が、問題とされたのである。たとえば、つぎのように。

「天は自ら助くる者を助くと古人はいへり、吾人が十年一日の如く労働運動に従事し我労働者の地位を高めんとするものは労働者間より有力なる運動者起りて労働者の解放を計らんことを渴望すればなり、吾人の職分は労働者に向つて其自覚々醒を促す事にあり、如何に吾人が尽力し奮闘するも労働者にして自ら立たずんば吾人の尽力と奮闘は何の効果も無し、吾人は今労働者に向つて自治自營の必要と其手段方法を詳細に説示して労働者諸君の深思熟考を求めんとす」^⑨

片山の脳裏にたえず「労働者（民衆）」の無惨な生活がやきつつけられていたことは確かであるにしろ、わたしたちはこのようなものから、いくらかなりとも実体的にとらえられた、あるいは思想的にとらえられた「労働者（民衆）」を見出すことはできないはずである。せいぜいそれは、またそのような「労働者（民衆）」像をもつ片山の日常活動の「妥当性」を評価する見解も、暗黙のうちにかあるいは積極的にそれに同意するという点で、恣意的なものだとかいえないだろう。なぜなら、片山のプラグマチックな発想、よくいえば「労働者（民衆）」の「主体性」を形成しようとはかつた発想に対して肯定的な評価がなりたつたためには、そもそも「労働者（民衆）」が、生活的にも職業的にも社会的にも、ようするにあらゆる面で「無知」であり、あらゆる面から「啓蒙さるべき存在」である、という片山の通俗的でかつ馬鹿げた見解を受け入れなければならぬからである。そのようなものは、吉本隆明の言葉をかりれば、「日本型知識人の存在様式のなからから、『一般大衆』を視るため、仮構のイメージとしてこしらえられた」ものでしかないからである。^⑩

片山がこのような発想でしか、「労働者（民衆）」をとらえられない、その思想的な根拠を指摘することは、それほどむずかしいことではない。その多くは、いままで何度もくりかえしてきたように、「欧米への後進（劣等）意識」から日本の「民衆・社会構造」を、「近代化」していない「遅れたもの」、のちには「合理」的に「修正しなければならぬもの」、

と考えるところからきている。いいかえれば、日本の「民衆・社会構造」、そして「憲法」との思想的格闘を自力でなすことなく、結局「欧米のタネ本」で解釈するという方法が片山にとって、それらを洞察することと同義だったということ、つまり片山は、日本の資本制、そして国家をもっぱら「後進(劣等)性」、のちには「跛行性」でとらえるだけで、それがそれ自体としての独自の「実体」をもつことを、ほとんど考察のそこにおいていたところからきているのである。

なるほど片山にとって「日本の現実」は、帰朝者としてどこかの教会で「社会改良事業」をおこなおうとした片山を「労働運動・社会主義運動」にのめりこませ、最初の妻を死においやり、再婚後も家族を離散させ、そして片山を「ノイローゼ」になるまでくたばらせたものではあった。だが、思想的にみれば、「日本の現実」は片山によって風景のようなものとしてはながめられていても、決して「実体」としてとらえられてはいなかったのである。なぜなら、それがたとえ石川啄木・夏目漱石・北一輝のように本質的ではなくとも、もし「日本の現実」が片山をいくらかなりともとらえていたとするなら、本多秋五が「転向文学論」のなかで、大きく眺めれば日本の転向の問題がとどのつまり、輸入思想の日本国土化の過程に生じる軌りに帰せられるとべているような意味でも、「欧米のもの」を日本に移殖しようなどという単純な「進歩主義（世界の大勢論）」は、出発点はさておくとしても、それと「軌り」を生じずにはおかなかったはずだからである。わたしたちが、片山の生涯の思想にその「軌り」のかげらすら見出せないなら、それは「日本の現実」を棚上げあるいは欠落させることによってなりたっていると考えてよいのである。日常生活にそくしていえば、虚妄なイメージで虚妄な存在に語りかけている、鶴見俊輔風がいいなおせば、海外から輸入した言葉と思想で民衆を改造しようと試みる^④、といった構図である。つまり思想的にみれば、「民衆の存在」については手もふれえなかったし、「民衆の存在」からも何も受けとらなかつたということである。片山の場合、「生活としての在米体験」を「構究した思想」から棚上げあるいは欠落させ、全く別物としたことが、ちょうどそれに相応していたのである。いいかえれば、すでに「思想としての在米体験」のあり方のなかに、片山の日常活動の虚妄さは予感されていたのである。

ただ、片山が運動のなかで終始持ち続けていたプラグマチックな発想だけは、それを生みだしたと思われる「生活としての在米体験」とともに、考えるに値するだけの重量をもっている。それは、運動家としてではなく片山を「生活者」として見たときに始めて、とりだせるもののように思われる。片山がその場では、とくに金の面で他人のおもわくなどに頓着せず自己中心的であったぶんだけ、「ブルジョアデモクラート」としての条件を備えていたからである。もし片山の「進歩性」を云々したいのなら、そこをおいてほかにないように思う。

- ① 片山潜「日本に於ける社会学講究の必要」『國民之友』三四八号
一八九七年五月一日
- ② 同「日本に於ける労働問題」『六合雜誌』二〇〇号 一八九七年八月一日
- ③ 同『労働者之良友』 ぎんぐすれい館 一八九七年 七六頁
- ④ 同「日本に於ける社会学講究の必要(続)」『國民之友』三四九号
一八九七年五月二日
- ⑤ 前掲片山『渡米案内』 四〇五頁これは一九〇一年に書かれたものであるが、帰国直後も当然このような発想をもっていたといつてよい(本論2参照)。
- ⑥ たとえば前掲片山『渡米の秘訣』
- ⑦ たとえば、つぎのような言葉はその「心情」あるいは「肉声」をよく示している。
「……ご想像もつくと思いますが、いま、日本は、大きな道徳的・知的・政治的な危機をむかえています。あらゆる分野が混沌としていて、改良がどこでも必要とされています。わたしがいまやっているのは、辛苦にみちた大衆を改良することですが、それは上流階級の人びとにも影響をあたえることになるでしょう。(パーカ宛一八九八年一月一七日付書簡)前掲加藤「片山潜のいくつつかの書簡についで」所収二二頁」
- ⑧ 前掲片山『自伝』 一〇〇頁
- ⑨ 前掲片山『わが回想』上 一四三頁
- ⑩ 松沢弘陽『日本社会主義の思想』 筑摩書房 一九七三年 四二頁
- ⑪ たとえば、前者については池田信の見解(『日本社会政策思想史論』 東洋経済新報社 一九七八年)、後者については小山弘健・岸本英太郎の見解(『片山潜』第一部 未来社 一九五九年)。
- ⑫ 立川健治「高野房太郎」『史林』六五卷三号 一九八二年 一二九〜一三一頁
- ⑬ 片山潜「工場法と工業」『東洋経済新報』一〇五号 一八九八年一月二五日
- ⑭ 同「工場法」『社会新聞』六〇号 一九〇九年一月一日
- ⑮ 『社会主義者沿革』上巻 近代日本史料研究会 八四〜八五頁
- ⑯ 岡田宗司編『革命的社會主義への道』 刀江書院 一九七〇年所収 二四〇頁
- ⑰ なお、以後片山と対比するという観点から、簡單とはいえない北一輝についてふれるが、北に關しては滝村隆一の労作『北一輝——日本の國家主義』(勁草書房 一九七三年)から示唆を受けた。北のみならず日本の「社会主義」を考えるうえで、滝村のこの著作は必読書である

- ように思う。
- 18 前掲片山潜生誕百年記念会編『片山潜著作集』第二巻 一九六〇年所収 一二六頁、一三二頁
- 19 同右 一一三頁
- 20 片山潜『國体論及純正社会主義(北輝次郎君の著述を紹介す)』『光』一三三号 一九〇六年五月二〇日
- 21 前掲松沢『日本社会主義の思想』 九五頁
- 22 前掲隅谷『片山潜』 一九七頁
- 23 『社会新聞』四九号 一九〇八年二月一日
- 24 同右 七二号 一九〇一年一月十五日
- 25 たとえば『我社会主義』第二章社会的革命(岸本英太郎解題)『都市社会主義我社会主義』 実業之日本社 一九四九年所収 三四八～三五五頁
- 26 前掲松沢『日本社会主義の思想』 五一頁
- 27 松田道雄『日本およびロシアの初期社会主義』(『在野の思想家』岩波書店 一九七七年 六二頁)
- 28 たとえば『都市社会主義』・『我社会主義』・『革命的社会主义への道』
- 29 たとえば前掲片山『わが回想』下 一七八頁
- 30 片山潜『革命的社会主义への道』(前掲岡田編書 一〇三頁)
- 31 片山の「渡米協会」の活動は、亀井俊介がいうような社会主義者片山の思想とその樂觀的な「自由な労働と勉学の園」というアメリカ観との対比がおもしろい(前掲亀井『自由の聖地』一六六～一七〇頁)というような問題でもなければ、隅谷三喜男がいうような「人口問題」についての「終局的な解決策としての社会主義と、現実的な当面の対策としての渡米奨励」(前掲隅谷『片山潜』一四二頁)という問題でもない。それは、「思想としての在米体験」の位相を象徴しているという問題である。
- 32 前掲片山『渡米の秘訣』 四〇頁
- 33 ハイマン・カブリンは、その著書『アジアの革命家・片山潜』(辻野功訳 合同出版社 一九七二年)のなかで、片山を「樂觀主義者」として描いているが、それは片山のこのような面に着目したからだと思われる。「進歩主義(世界の大勢)」を信仰しているという面から片山をみれば、オメデタイ「樂觀主義者」という容貌をおびていないことはない。
- 34 片山潜『我同志に告ぐ』、『社会新聞』六〇号 一九〇九年二月一日
- 35 同『東鉄車掌の沙上偶話』『東洋経済新報』五七九号 一九二一年一月二五日
- 36 飛鳥井雅道『初期社会主義』『岩波講座日本歴史17』近代4 一九七六年 一七〇～一七一頁
- 37 松尾尊允『大正デモクラシー』岩波書店 一九七四年 一五〇頁
- 38 わたしはこのことを、一九七九年度京都大学大学院「修士論文」で論じたが、まだ未発表なので、改めて別稿を用意したい。
- 39 片山潜『消費組合の話』『社会新聞』二四号 一九〇七年二月一日
- 40 吉本隆明『丸山真男論』(『吉本隆明著作集』12 勁草書房 一九六九年 二九頁)
- 41 本多秋五『転向文学論』(『第三版 転向文学論』未来社 一九七一年 二一六～二一七頁)
- 42 鶴見俊輔『戦時期日本の精神史』岩波書店 一九八二年 三七頁

おわりに

片山の思想は、数学的にたどっていえば、X軸に「社会ヴィジョン」を、Y軸に「進歩主義(世界の大勢論)」を、Z軸にはプラグマチックな発想をもった(ねばりづよい)「日常活動」をおき、それぞれの座標をとってそれらの交点をもとめていけばその姿が現われる、といった類のものである。そして、片山が「生活」を思想化する、逆に思想のなかに「生活」をもみこなす、あるいはそれとつながりがあることだが「欧米のタネ本」を「日本的な現実」のなかでもみこなして読みかえていく、という発想も方法論もちあわせていなかったことをみれば、片山の思想を生みだし支えていた「心情」あるいは「肉声」は、「在米体験」が契機となって深く刻印された「欧米の先進(優越)性」に対する「日本の後進(劣等)性」への意識であったということが出来る。ここで片山が棚上げあるいは欠落させてしまったのは、対象としているはずの「日本の現実」そのものであった。このような片山の思想のあり方は、「思想としての在米体験」のなかに予感されていた、というのがわたしの考えである。

片山の思想が「つまらない」のは、よくいわれているように、また片山自らがいつているように、「抽象的思考力」が劣り文章もへただったからだといった問題ではない。もしそうだとするならば、片山の思想は、理論的に精緻にしていけば、「つまる」ことになる。それは、思想のあり方そのものに帰せられなければならない。また理論的な問題はあるにしろ、片山の軌跡とりわけその「日常活動」の「進歩性」は評価しなければならない、ということにもならない。なぜなら、片山の思想と実践のなかで、またその延長線上でも、「民衆」や「社会」、そして「国家」とまみえることはできないからだ。わたしたちは、片山を通してここで、日本の「進歩的な社会運動・思想」の一つの典型と出会っているのである。

わたしは、片山のような思想・運動のあり方は、一五年戦争期において「欧米への後進(劣等)意識」からくる「進歩主義(世界の大勢論)」ではなく「民衆の動向」と「国家」にひきつけられれば、必ずや「日本的な社会ファシズム」に転化

するといいたい気がするが、それをいうにはもう少し時間が必要なので、ここではそのことを指摘するだけにとどめたい。なお、最終的な離日後の一九一四年以降の片山をほとんど論じなかったのは、それ以降の片山がそれ以前の片山のちょっとしたつげ、たしにすぎない、とわたしと考えているからである。つまり、一九一四年以降の片山の軌跡は、基本的には、わたしが本論でこころみた解析の方法でつかみぎれるはずだからである。その他の理論的な問題は、たとえば片山からレニンの『国家と革命』の粗雑な講釈を聞くより、本物の『国家と革命』を読んだほうがよいといったことに類する問題である。

(京都大学大学院生)

lisme à la société moderne et à l'industrialisation, et puis ses relations avec le peuple en mettant au point le catholicisme intransigeant qui était la majorité dans l'Eglise et dont il s'agit de la caractériser «anti-moderne».

Le catholicisme intransigeant est plutôt le catholicisme populaire, contre-révolutionnaire et hostile à l'industrialisation que le catholicisme anti-moderne et favorable à l'Ancien Régime. Ce mouvement n'est pas une simple réaction, mais une réponse active à la société industrialisée, la société de masse.

Katayama Sen 片山潜

by

Tachikawa Kenji

In this paper I do not analyse Katayama Sen's ideas and movements on the basis of documentary records and interpretations but try to grasp him by considering what made him cling to such ideas and what drove him to such movements. [Seeing him from the viewpoint, his experience in the United States from 1884 to 96 (from his twenty-five years of age to thirty-seven) proves to count so much that it might be said to orient his future career. There in the United States he took the colossal massiveness and affluence which Euro-American societies seemed to him to show off in every respect for the *forwardness* (*senshinsei*) 先進性 and accepted it and acted as if he owned it, while he failed to put into question or shelved the *backwardness* 後進性, actual conditions, of Japanese society. *This*, in his case, led to the passionate obsession that, for the sound and rational *modernization* (*kindaika*) 近代化 of Japan, it was indispensable to transplant the advanced social ideas and movements of Euro-American societies in Japan. Taking away odds and ends from his career, there always remains the obsession. And it is the substance of his ideas and movements.